

LIBRARY

鳥取大学附属図書館報

137

Mar. / 2022



INDEX

- 01 **巻頭言**
デジタル化時代に求められる
大学図書館の役割 松浦達也
- 03 **私の選んだこの一冊**
『臨死体験』 今村武史
『前へ! : 東日本大震災と
戦った無名戦士たちの記録』 緒方英彦
- 07 学生図書館ワーキンググループ活動のご紹介
- 09 **トピックス**
附属図書館の新型コロナウイルス
感染症対応
附属図書館作成 講習会等動画のご紹介
医学図書館カウンターに
トークスルーを設置しました
第62回 中国四国地区大学図書館研究集会

デジタル化時代に求められる大学図書館の役割



松浦 達也（まつら たつや）
副学長（附属図書館長、医学図書館長）、医学部教授

新型コロナウイルス(オミクロン株)感染の第6波はピークアウトの兆しはあるものの地域によっては感染者数が高止まりする傾向も見られており、収束にはまだ時間がかかりそうである。私が附属図書館長に就任して2年目からは新型コロナウイルス感染対策に追われる日々が続いている。一方で、この感染症拡大により社会構造の変化は急速に進もうとしている。会社の勤務や会議はリモートによる割合が急拡大し、新型コロナウイルス感染拡大があたかもデジタルトランスフォーメーション(DX)推進の起爆剤になったような気さえする。

そのような社会状況の中、大学図書館も大きな変化を求められている。鳥取大学附属図書館は、2017年に「鳥取大学附属図書館ビジョン2021」を策定し、目標の達成度を毎年確認し、見直しも行いながらビジョンの実現に向けて取り組んできた。そしてこの度「鳥取大学附属図書館ビジョン2025」を策定する時期を迎えた。今回のビジョン2025も、鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」を実現するために、教育・研究の支援を行う学術情報基盤拠点として、さらには地域社会に貢献する図書館としての役割を担い、その達成に必要な学術情報資源の整備と人材育成に努めることを基本としているが、それに加えて本学のデジタル・キャンパス構想に積極的に協力する要素も組み入れた。ビジョン2025の策定にあたり、デジタル化時代の

大学図書館の役割について考えてみた。教育支援に関しては、デジタル化時代にあっては非来館型の学修支援に対応する必要がある。そのため、電子書籍を質・量ともに充実させることや電子ジャーナル・学術文献データベースに学外からアクセスし易いような環境を構築しなければならない。この点に関しては、図書館だけで取り組めるものではないので情報基盤機構の協力を得なければならない。しかしながら、館内の実空間の重要性は変わらない。ジョン・ポールフリーの「ネット時代の図書館戦略」¹⁾によると、図書館は、騒がしくて気が散りがちなこの世界に必要な不可欠な、黙想にふけることのできる空間を作り出しており、閲覧室独特の雰囲気は学習を促してくれるとしている。また、自分のアパートや寮の部屋で勉強していると、途中で他の活動に関わったり、気をそらされたりする可能性があるが、図書館は勉強に集中できる場所である。紙の本が目的でなくとも学生が図書館という空間へやってくる2つ目の理由として、他者から得られる支援と仲間意識をあげている。同じ経験を共有し、近くで勉強し、同時に休憩をとるような友人がいれば、一人の時よりも進みが速く感じるだろうと指摘している。コロナ禍で2つ目の目的に支障をきたしているのは残念でならない。本学附属図書館はWi-Fiが自由に繋がり、スマートフォンやタブレット端末でグーグルやウィキペディアなどを利用し、即座に情報を手に入れるこ



とができる。これだけなら、自宅やカフェレストランなどでも対応できるが、その情報を精査するため、または一次資料にあたりたい場合は学術文献データベースがあり、電子ジャーナルも整備されている大学図書館が最適な場所である。また、デジタル情報だけでなく多くの紙媒体が隣接する書架には並んでおり、司書に尋ねたり、ネットで検索すれば自分の欲しい資料を簡単に見つけることができる。このようにデジタル化の時代にあっても図書館の価値は決して低下することはないと考えられる。次に研究支援に関しては、上述した電子ジャーナル・データベース・電子書籍等の安定かつ適切な整備に加え、知の共有のために本学で生み出された教育研究成果のデジタル化による長期的な保存とともに、それらを積極的に学内外に発信する必要がある。この点に関しては、令和元年度に「鳥取大学オープンアクセス方針」を、令和2年度に「鳥取大学研究成果リポジトリ運用要項」および「鳥取大学オープンアクセス方針実施要領」を策定し、本学の教育研究成果のオープンアクセス化を推進している。今後は、研究データの管理・公開に向けた取り組みを行い、オープンサイエンスを推進したいと考えている。地域貢献では、これまでと同様に鳥取県内の大学・公共図書館との連携を深め、これらの図書館が属する県立図書館協会のDX推進にも協力していこうと考えている。

以上のようにデジタル化を進めるにあたっては、図書館も自ら変革していくことは必須である。図書館職員もこれまでのように司書業務だけを行うのではなく、デジタル化時代に求められる新しいスキルを身につけ

なければならない。この点に関しては、すでに「レポートの書き方講習」Step1、Step2、理系レポート編の3本の動画コンテンツを作成し、学内に公開しているほか、図書館の利用案内の動画コンテンツ「附属図書館中央図書館へようこそ」を作成し公開した。今後さらなる動画コンテンツの作成や、希少資料の電子化などに関する知識・スキルを身につけることも必要になってくる。そのためには、積極的に学外の講習会などへの参加を促し、図書館の重要な部分を占め、これからも必要不可欠である職員(司書)の実力向上に努めなければならない。

最後に、この原稿は令和4年2月下旬に執筆しているが、私もこの3月を持って定年である。附属図書館長として3年間いろいろな経験をさせていただいた附属図書館と職員の皆様には心から感謝を申し上げたい。繰り返しになるが、デジタル化時代にあっても大学図書館の存在意義は決して低下しないだろう。ただし、将来の完全デジタル化時代に向けての備えを怠らなければ。

参考文献

- 1) ジョン・ポールフリー(雪野あき 訳)
「ネット時代の図書館戦略」原書房



中央図書館
配架準備中

『臨死体験／立花隆著』



今村 武史 (いまむら たけし)
医学部 教授

皆さま、こんにちは。今は昔、私が研修医の時に手に取った本を紹介させていただきます。医師として働き始めて間もない頃、まずショッキングであったことは受持ち患者さんの逝去でした。肺がん末期で入院されていた方はご高齢で、当時の私からは祖父に相当する年齢です。すでに死期を悟られていましたので、死に対する不安や恐怖が言葉の端々より伝わってきました。若輩者の私がどのように対応すれ

ば良いのか苦慮する日々が続いていた折、本屋でふと目にとまったのが「証言・臨死体験」という本でした(標記の「臨死体験」の姉妹本で、同一著者です)。最初はオカルト系の本だと思ったのですが、著者が「知の巨人」として知られる立花 隆氏というギャップに興味をひかれ、気がつけば立ち読みをしておりました。結局、標記の本と2冊セットで買い込み、当直業務の合間に読み耽ったことを思い出します。本の帯には、読者の感想として「死への恐怖がなくなった」という詞が紹介されていましたが、私自身にも類似の読後感がありました。これだ!と思ったのが一連の読書の始まりで、図書館に通っては死生観や死後世界に関する様々な本を読み漁りました。もちろんオカルト批判を受けている本もあるのですが、驚いたことに宗教思想とは一線を画し、体験者の聞き取り調査に基づいて客観的記述を目指している著作が欧米の作者でも多数ありました。オカルト系とは思えない著者で、印象に残っている本は以下のようです(括弧内は著者名と当時の職業)。



- ・証言・臨死体験（立花 隆:作家・評論家）
- ・死ぬ瞬間（エリザベス キューブラー ロス:精神科医）
- ・死後の世界研究（隈元 治彦:毎日新聞記者）
- ・生きがいの創造（飯田 史彦:経営学者）
- ・人は死なない（矢作 直樹:救命救急医）

当時はホスピス(ターミナルケア)が欧米から導入されて間もない頃でしたので、ホスピスにおける臨終への対応についても興味を持ち、随分と資料を探したのですが、背景としてキリスト教思想があるものの納得できるような答えは見つかりませんでした。その後日本では仏教ホスピスが生まれ、その背景思想として輪廻転生があるという講演を聴き、ようやく答えに辿りついた気がしました。真実かどうかは別として、死ねばあの世へ行き、またこの世に生まれ変わる輪廻転生において「魂は死なず」という思想は、日本人にとって死への恐怖に対する救いとなる考え方ではないかと思いました。その後にもう一度、キリスト教の教えではどうかと調べてみたのですが、死者が蘇る話はあるても、聖書には死後の世界は描かれていません。否定されているわけではなく、記述がないのです。



結局、終末期の受持ち患者さんに前述の著作をお渡ししたことが少なからずあったのですが、中にはとても喜んでいただいた方がおられまして、「あの世」の話題で楽しく盛り上がったこともありました。多少なりとも気が紛れる効果はあったかと思いつつ、その方のベッドサイドに行きますと、怪談の本を読んでおられて絶句したことは今では懐かしい話です。私のその後の読書遍歴は恥ずかしながら適当なものですが、現時点での読後感は、「日本人はお得な民族だなあ」というものです。いろいろな宗教・思想を頑固に否定しない日本人には「あの世」があれば、お盆もクリスマスもある、世界中でもかなりお得な民族ではないでしょうか。ハロウィーンの群衆に紛れて死者として蘇ってもよし、お盆に迎えて下さるなら化けて出てもよし、死に対する恐怖はかなり小さくなったようです。この先どのように変わっていくのか、それも読書の楽しみではあります。



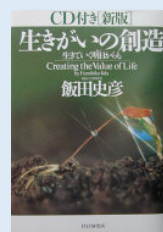
『臨死体験』
立花隆著
文藝春秋, 1994.9



『死ぬ瞬間:死とその過程について』
E・キューブラー・ロス著
中央公論新社, 2001.1

医学図書館 147:Tac:1 外

中央図書館 開架
146.1:Shi 外



『CD付き[新版]生きがいの創造』
飯田史彦著
PHP研究所, 2003.4

中央図書館 開架
147:iki

『前へ! : 東日本大震災と戦った

無名戦士たちの記録／麻生幾著』



緒方 英彦（おがた ひでひこ）
大学院連合農学研究科 教授

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの嵐が世界中を駆け巡っている中、東日本大震災十周年追悼式が開催された。10年前の2011年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、地震だけでなく津波も引き起こし、大きな傷跡を広い地域に残した。研究室のPCで見た津波は衝撃的であり、伝えられるニュースに釘付けになりながらも、翌日に予定されていた研究室の教授の定年退職祝賀会の開催はどうしたものかと、はじめは少し離れた気持ちであったことを今も記憶している。しかし、時間を追うごとに詳細に報道される様々な被災状況を見聞きしている中で事の深刻さを知り、自分に何ができるかを考えだしていた。とは言え、救助、救援の経験もない自分が直ぐに行動に移せる状況にもなく、農地・農業水利施設の被災状況調査としてようやく現地入りできたのは、2カ月経過後の5月21日であった。ただし、立ち入り許可が得られたのは、宮城県の名取平野の海岸部だけであった。現地は、報道で見た状況といまだ変わらずひどい惨状であったが、最も気になっていた三陸太平洋沿岸部には行けずに鳥取に戻るようになった。

鳥取に帰ってきて数カ月後に出会ったのが、今回紹介する本書である。本書は、3章構成になっており、第1章は「福島第一原発、戦士たちの知られざる戦争」、第2章は「道路を啓け！ 未曾有の津波被害と戦った戦士たち」、第3章は「省庁の壁を越え、命を救った勇者たち」である。文章として記されている「心の線量を計る必要がある。隊員たちの思いはそれぞれで違うのだ。」、「終りのない戦い、それこそもっとも手強い敵である。」、「ガレキの中には・・・人がたくさん・・・、バックホーを使うことはできず、手作業で道を開けるしかない。」などの言葉は、その場を想像することしかできない私にとってどれも衝撃的であった。

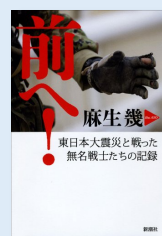
特に自分の専門分野からも当時の記録として注目したのが第2章である。この章では、救命、救援のためのルートを切り啓いた国土交通省東北地方整備局と民間建設業者の方々の行動が記されており、この方々の活躍により未曾有の津波被害に見舞われた三陸太平洋沿岸部に繋がる道が確保された。そのオペレーション・コールが「くしの歯作戦」である。三陸太平洋沿岸部に向かう大動脈は国道283号であったが、これが通行不能であったために、南北を貫く内陸部の国道4号から、くしの歯状に太平洋沿岸部へ延びる国道16本を啓開（けいかい）するオペレーションである。啓開という言葉は初めて知ったが、道路や橋の障害を取り除いて道を切り開き、通行不能ならば迂回ルートを確保する、という意味だそうである。翌日の12日には11ルート、15日には15ルートが啓かれ、救急車や警察、自衛隊などの緊急車両の通行が可能になった。なんと、救命可能72時間のうちに、三陸太平洋沿岸部に向かうルートがほぼ確保されたのである。「災害時の東北地方整備局のマニュアルには、復旧の項目はあっても啓開の文字はなかった。つまり、復旧工事をして元に戻すことは



あっても、救援ルートの開き方は書かれていなかった。」この一文からも、ルートを切り拓くこと自体が戦いであったことを物語っている。

三陸太平洋沿岸部がなぜ気になっていたかという、私の好きな作家である吉村昭の「三陸海岸大津波(文春文庫、2004年)」を以前に読んでいたからである。初版は1970年に中公新書から刊行された「海の壁 三陸沿岸大津波」であるが、1984年に改題されており、私が読んだのは再刊されたものである。この本は、東北地方太平洋側にある三陸海岸沿いを襲った1896年(明治29年)の大津波、1933年(昭和8年)の大津波、1960年(昭和35年)のチリ大地震大津波のルポルタージュである。この本を読んで以降に目にした本や資料には、次のような言葉が並んでいた。「大地震の後には津波がくる。」、「津波の恐ろしい体験を教訓とし、後世に語り継ぎ生かすものとして未来に残さなくてはならない。」、「記憶が薄れ、備えが疎かになった時が最も被害が大きくなる危険性が高いことを強く認識すべきである。」いずれも、2011年大津波でその意味の深さが再認識されたと思うが、吉村自身は40年前から本を通して同様の警告を発していたのである。吉村は2006年に亡くなっており、東北地方太平洋沖地震を目の当たりにしていないが、三陸海岸の各地を襲った過去の大津波取材し、記録となる本を書いた作家として、どのような思いを持ったのか、そしてもし取材をしていたらどのような本を書いたのか非常に気になる。そして、被災地で様々な活動した方々の記録をどのように書いたのか、本書と読み比べてみたかったと思う。

本書は、人を中心とした記録であるが、情報が錯綜し、現状の把握が難しい中、とにかく「前へ！」と突き進んだ人々が、どのような思いで行動を起こし、それぞれの場所で何を思ったのかなどを知ることができる本である。著者は、最後に「一般の目に触れる機会は少ないが、「日本の力」は歴然と存在していた。」と書いている。あれから10年、日本の力である“人”が戦った記録として、記憶が薄れることがないように、時々にもでも読むべき本であると思われる。今回は、特に第2章を取り上げたが、第1章、第3章では、原発の現場で、各省庁の持ち場で戦った様々な職の方々の記録も記されており、それぞれの職を目指す学生にも是非に読んでほしい一冊である。



『前へ!: 東日本大震災と戦った無名戦士たちの記録』
麻生幾著
新潮社, 2011.8

医学図書館 369.31:Aso



『三陸海岸大津波』
吉村昭著
文藝春秋, 2004.3

中央図書館 開架
452.512:San

学生図書館ワーキンググループ活動のご紹介

学生図書館ワーキンググループ(以下、学生WG)では、学生の視点で図書館をよりよくするために活動しています。今年も新型コロナウイルス感染症によって対面活動が難しい状況でしたが、オンライン定例会で話し合いを進め、下記の新規イベントを行ってきました。

◆オンラインビブリオバトル

ビブリオバトルとは、5分で本を紹介し、読みたくなった本(=チャンプ本)を投票して決定する書評会です。例年、対面で「全国大学ビブリオバトル」の地区予選・地区決戦を行っていましたが、今年度は大会が中止となったため、10月9日(土)に学内者のみのオンラインバトルとして実施し、総計8名の参加がありました。

発表本書名	著者等	発表者
kaze no tanbun 特別ではない一日	我妻 俊樹著	工学部1年
短歌パラダイス—歌合二十四番勝負	小林 恭二著	図書館職員
「役に立たない」研究の未来	初田哲男[ほか]著	農学部3年



オンラインビブリオバトル実施風景

◆新入生・留学生向け図書館ツアー

(1) 4月: 新入生歓迎と学生WG紹介を兼ねたツアー

オンライン新歓では雰囲気かわからず入りづらいため、図書館の使い方を説明しつつ、学生WGへの勧誘を行いたいという意見から、オンラインではなく少人数での図書館ツアーを実施しました。

(2) 12月: 留学生向けツアー

学生WGが館内ツアーを行い、国際交流センター公認の学生団体「G-Frenz」が通訳するという協働イベントとして実施しました。実施後アンケートでは13件の回答があり、満足度平均が5点満点中4.6点と高評価のイベントになりました。

ツアー内容	実施時期	参加者	対応者
新入生向け	4月(2回)	4名(農・工・地1年生)	学生WG 各日2名
留学生向け	12月(1回)	15名 (農・工・地B1/M1/D1)	学生WG 2名 + G-Frenz 5名
計		19名	11名



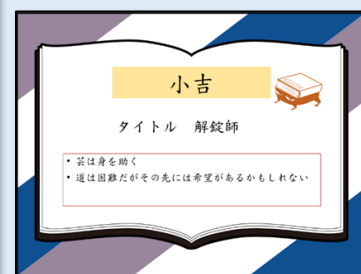
図書館ツアー風景

◆その他トピックス

- ・例年通りの定期選書に加え、長期休暇選書を追加
- ・学生WGユニフォーム(エプロン)や入会特典の追加(貸出期限の延長+冊数増加等)
- ・鳥取県立図書館資料を取り寄せた「スキマ展示」や「クリスマス福袋」などの展示活動
- ・学生WGのTwitterを活用したebook紹介や「本みくじ」イベントの実施
- ・教員との連携イベント「レポート添削」への協力



エプロンデザイン



本みくじ例

◆お問い合わせ先

- ・E-mail: gakuseisensho@gmail.com
- ・Twitter: [@gakuseisensho](https://twitter.com/gakuseisensho)
- ※学生WG参加希望の場合は下記より
中央図書館 学術情報係
Tel: (0857)31-5673 (内線: 7060)
E-mail: ac-gakuju@ml.adm.tottori-u.ac.jp



ebook(TOEIC本)紹介

附属図書館の新型コロナウイルス感染症対応

10月	ビブリオバトルをオンラインで実施(9日) 中央図書館で学外利用者の来館利用を一部再開(18日) 中央図書館学生選書会をオンラインで実施(おうちでお気楽プチ選書) 医学図書館カウンターにトークスルーを設置
12月	中央図書館学生選書会をオンラインで実施(おうちでお気楽プチ選書) 中央図書館学生選書会をオンラインで実施(お題選書)
1月	中央図書館で学外利用者の来館利用を停止(18日)

附属図書館作成 講習会等動画のご紹介

manabaの「附属図書館」コースから、学内の方にレポートの書き方講習会、データベース使い方紹介、文献情報の収集と資料の入手、文献情報の管理等の解説動画および資料をご利用いただけるようにしています(一部準備中)。また、学外の方に向けて中央図書館の館内案内動画を第23回図書館総合展の企画 図書館見学会ONLINEで出展、公開しました。この館内案内動画はどなたでもご利用いただけるようにしています。ご相談に応じて講習会および動画作成等も承って

います。詳細は図書館Webサイトの講習会のご案内(鳥取地区)をご覧ください。
※状況により対応ができない場合がございます。予めご承知おきください。

・manaba「附属図書館」コース
鳥大IDでご利用ください
https://manaba.center.tottori-u.ac.jp/ct/course_63104



manaba 附属図書館コース	内容等
附属図書館中央図書館へようこそ	鳥取大学附属図書館 中央図書館(鳥取キャンパス)の利用案内です。新入生、学部学生向けの中央図書館の利用案内、配架場所等を説明しています。
情報リテラシ	新型コロナウイルス禍により、遠隔授業で行った文献検索講習の動画です。OPAC検索から貸出までの手順、CiNii等の代表的な契約DBを紹介しています。
レポートの書き方講習会 Step1、2	Step1は避けて通れないレポートについて一から説明します。Step2は教育センター桐山 聡准教授によるStep1の補足や、サンプルレポートなどを使った演習となっています。
レポートの書き方講習会 理系レポート編	理系レポート編では、図表の作成時の注意点や、有効数字の考え方、数式等の書式について説明しています。
データベースの使い方紹介	利用可能なデータベースの概要、使い方などを説明してします。Web of Science、Pubmed など
文献情報の収集と資料の入手(準備中)	文献情報の収集と資料の入手、これから論文等を書かれる方向けに、各種文献情報の集め方や実際の資料の入手の仕方について説明しています。
文献情報の管理(準備中)	文献情報の管理について、その必要性や利用できるツールの使い方、参考文献リストの作成について説明します。EndNote Basic など

第23回図書館総合展 図書館見学会ONLINE	内容等
鳥取大学附属図書館の館内案内動画 https://www.libraryfair.jp/online_tour/2021/65	オープンキャンパスや学内向けに作成した中央図書館の館内案内動画をブラッシュアップしたものです。改修工事を行ったのは10年以上前ですが、今も少しずつレイアウト変更等を行っています。地方の大学図書館ですので見学の機会もあまりないかと思っておりますので、ぜひご覧ください。



医学図書館カウンターにトークスルーを設置しました



医学図書館カウンターに、令和3(2021)年10月よりトークスルーを設置しています。トークスルーにはスピーカーとマイクが搭載されており、相手側に声を拡張し届ける機能があります。

現在、新型コロナウイルス感染症の感染予防

の為、カウンターにはパーティションを設置していますが、パーティション越しでの対話では、どうしても声が届きにくい、聞き取りづらいことがあります。そのような際に、トークスルーをご活用いただいています。

利用方法は、マイク部分に話しかけるだけという簡単なものです。スイッチ等を入れる必要がありません。トークスルーを利用してカウンター職員の声が聞こえにくい場合は、トークスルー機械の裏に音量を調整するつまみがついているため、音量を上げて聞こえやすい大きさに調整していただいています。

医学図書館へのご来館時、必要の際はぜひご利用ください。

第62回 中国四国地区大学図書館研究集会

令和3年10月22日、鳥取大学附属図書館(当番館)、公立鳥取環境大学情報メディアセンター、鳥取看護大学・鳥取短期大学附属図書館別館の3館運営により第62回中国四国地区大学図書館研究集会をオンラインで開催しました。『ウイズコロナ・ポストコロナ時代の図書館』をテーマに中国四国地区国公立の64大学等77名が参加し、天理大学人間学部総合教育研究センター教授古賀崇氏より「コロナ禍のもとの、またこれからの大学図書館」と題し、講演が行われました。続いて鳥取大学、東京海洋大学、鳥取県立図書館から新型コロナウイルス感染



症への対策、教員、学生および図書館等の活動3件の事例が報告されました。それぞれの講演、報告に質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。



編集・発行

鳥取大学附属図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地

 <http://www.lib.tottori-u.ac.jp/index.html>

 <https://www.facebook.com/TottoriUnivLib/>

 https://twitter.com/TottoriU_Lib